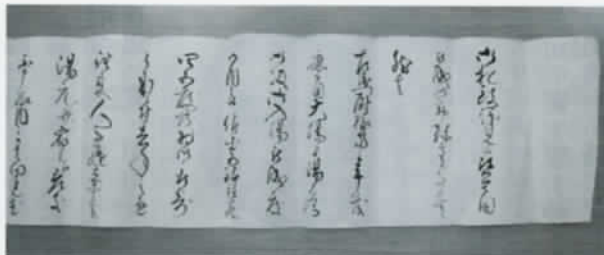


浅虫温泉では温泉の宅配サービスを行っている。200リットル（家庭の浴槽1杯分）で1500円。配達区域は青森市内に限定されており、東京で浅虫のお湯を堪能、という訳にいかないが、色々な商売があるものである。

さて、このような温泉の宅配は今に始まったことではなく、江戸時代からあつ



盛岡藩用人からの大湯温泉汲出し手配方了承の書状
（冒頭部分・八戸市立図書館蔵南部家文書）

た。もちろん、それを享受できたのは天皇や将軍、大名といった貴人たちで、彼らは気軽に湯治に行くこともできない。そのため温泉地から湯を取り寄せることが行われた。

熱海温泉では将軍に献上する「お汲み湯」があつた。

慶長9年（1604）に始まるとされ、毎年数回、定期的に江戸城本丸・西ノ丸に運ばれた。享保11年（1726）から同19年までの9年間に計3642樽も送られている（『熱海市史』）。その汲み出し・運送には厳格な作法があつた。また、正保元年（1644）以降は箱根温泉からも献上された。

さて、現在の青森県の諸藩では、八戸藩の藩主たちが温泉の取り寄せを行っていた。他の藩、例えば弘前藩では、藩主が100名以上の隊列を組んで浅虫温泉へ湯治に行くことがしばしばあつた。しかし、八戸藩では領内にこれといった温泉地がないため、藩主自身の湯治は叶わなかった。代わりに宗家筋にあたる盛岡藩領の温泉から湯を運ばせ入浴している。いつ始まったか定かでないが、八戸藩庁の日記（目付所日記）では、元文5年（1740）に4代藩主南部広信が持の

はあつた。しかし、八戸藩では領内にこれといった温泉地がないため、藩主自身の湯治は叶わなかった。代わりに宗家筋にあたる盛岡藩領の温泉から湯を運ばせ入浴している。いつ始まったか定かでないが、八戸藩庁の日記（目付所日記）では、元文5年（1740）に4代藩主南部広信が持の

歴史に見る「温泉」⑦ 温泉の宅配今むかし

中野渡 一耕

（県民生活文化課
県史編さんグループ 主幹）

泉から1斗5升（約27リットル）入の樽2樽を取り寄せて入浴した。江戸詰の八戸藩士達は熱海や箱根といった名だたる温泉地に行っていたことが確認できるが、隠居したとはいえ前藩主となると、そう簡単に出かけられなかったのだらう。

8代信真も鹿角大湯から取り寄せている。文化6年（1809）と思われる盛岡藩用人から八戸藩家老あての手配方了承の書状が残っているが、その中に「当年も鹿角大湯より湯御汲のため」とあり、たびたび運ばせていたことが分かる。湯を5駄づつ4〜5度にわたり運んだ。盛岡藩用人は、輸送に伴い湯元や宿に負担を掛けないこと、道中難所もあるが、滞りなく運ぶよう指示している。

藩士の中にも湯を取り寄せる者もいた。例えば、享保8年（1723）に、病

治療のため、花巻の台温泉から3駄（1駄＝2樽）取り寄せた記事が最初である。

続く5代信興は藩主退任後も江戸で暮らしていたが、明和7年（1770）、痔・疝積（胃腸障害）・めまいの治療のため、湯治を目的に帰国を願ひ出ている。実際には鹿角の大湯温

らう。

8代信真も鹿角大湯から取り寄せている。文化6年（1809）と思われる盛岡藩用人から八戸藩家老あての手配方了承の書状が残っているが、その中に「当年も鹿角大湯より湯御汲のため」とあり、たびたび運ばせていたことが分かる。湯を5駄づつ4〜5度にわ

たり運んだ。盛岡藩用人は、輸送に伴い湯元や宿に負担を掛けないこと、道中難所もあるが、滞りなく運ぶよう指示している。

藩士の中にも湯を取り寄せる者もいた。例えば、享保8年（1723）に、病

自分の知行地に湯を取り寄せたいと申請している。個人で運ぶにはかなりの経費が掛かったと思うが定かではない。

貴人たちは温泉の取り寄せができたものの、やはり温泉は直接入湯したほうがいい、庶民でよかったと感じるのは筆者だけであろうか。



大湯温泉源泉（中野渡撮影）